



# 社会問題の処方箋を 経済学理論から提示

大学院シオ・アーツアンドサイエンス研究部  
創生科学研究部門 教授

内藤 徹 (なはいとう とおる)

## 経済学を駆使して地域のために

内藤先生の研究室(ゼミ)では現在学部生が二人、社会人院生が二人、それぞれが研究テーマを持って学んでいます。内藤先生の専門は空間経済学です。

空間経済学とは、特定の地域に人やモノが集積する原因を明らかにし、都市の発生メカニズムやそれに付随する様々な問題を経済学的に解明する学問分野です。

ミクロ経済学は、経済学の基礎理論の根幹をなすもので、家計(消費者)や企業(生産者)や政府といった経済活動を構成する経済主体の行動を研究・分析しますが、内藤研究室では、ミクロ経済学を上述の空間経済学に応用していま

す。医学や薬学は直接的に我々の幸福の改善を図りますが、社会科学である経済学は国家や行政の政策を通じて我々の幸福の改善を図ります。医師が問診もなしに開腹しないのと同じように国家・自治体も基礎理論の裏付けなしに施策することはできません。「経済学は、地域おこしや地域の防災などにも役立ちます。地域おこしなどは熱意も必要ですが、熱意だけでは行き詰まります。空間経済学では、様々なデータを分析して数値化する事によって、説得力のある提案ができます」

先生の研究は現在、工学部など経済や行政以外のコラボも期待されています。

よう、地域を科学的に見つめてみよう」と再び徳大生に。今年で3年目になります。最初の一年は別の先生でしたが、移籍のために内藤先生を紹介されました。

「内藤先生は若いのにrippぱです。数値の持つ意味を考えさせられます。多くのことを学びながら、教わったことを教師としても生かされています」

## くまごろうは経済学で世界へ

内藤先生の「愛と情熱だけではだめだ」の一言にガツンときたのは、天然酵母のパンを製造販売する「くまごろう」のオーナー、松浦徹(まつうら とおる)さん。「くまごろう」のパンは、学内の売店にも納品されています。味の秘密は天然酵母と日本伝統の醸造技術である麴(こうじ)で培養した「あこ天然培養酵母」。

大学を出てさしたる目標もないとき、叔父の天然酵母のパン作り

に魅せられ、徳島に帰って、自らの手でパン工場を建設してしまつた情熱家。いづれはこのパンを全国、いやパリやニューヨークまでもと大きな夢を抱いています



## 阿波踊りはハウマッチ?

ゼミの学生の二人は卒論のための準備をしています。

荒木(あらかき)のぞみ(4年)さんは徳島の大イベントである阿波踊りを、CVM(仮想的市場評価法)で評価するために、学生からアンケートを収集し、分析を行っています。



## 経済を数学する魅力

CVMとは、環境(ここでは阿波踊り)のように市場で取引されない財に対し、支払ってもかまわない金額(支払意思金額)を聞くことによって、環境(阿波踊り)の持っている価値を金額として評価します。

荒木さんは高校時代からボランティアを行い、阿波踊りの有名連にも参加。町づくりや地域おこしに興味があり、内藤先生のゼミを選びました。

「先生の授業はわかりやすくおもしろいです。おかげで難しい経済学がおもしろくなりました」



数学が大好きという織田八重(おだやえ・4年)さんは、経済を数学を用いて分析していくことに魅力を感じて内藤ゼミへ。研究は、ヘドニック・アプローチを用いて、徳島の地価や家賃などのデータを収集して徳島の地価の決定要因について分析します。不動産は様々な特性を有しているため、通常の経済分析を適用することが困難です。そこでヘドニック・アプローチを用い、不動産を多角的にとらえて、土地の特性や家計の住宅の購入活動という実際の経済(消費)活動から経済価値の推定を試みています。こうした手法は社会資本の経済価値や種々の政策の経済効果を評価する方法で、環境や自動車などの耐久消費財にも応用することが出来ます。「地価や家賃などの土地情報を分析することで、災害などへのリス



徳島大学で学位を取り、佛教大学で福祉学を学び、現在徳島文理大学保健福祉学部人間福祉学科で准教授を務める古川明美(ふるかわあけみ)先生は、「定年後は、私や子ども孫たちもお世話になっていくふるさとに恩返しが出来たらと考えています」とのこと。現在の研究対象は自主防災も含めた、高齢者がいつも自由に集えるサロンのような場所です。介護施設やグループホームなどはたくさんありますが、もっと身近に気軽に、そして経済的な負担の少ない地域拠点。しかし実現には多くのハードルがあります。そこでもう一度基本から勉強し